

1950年代の戦後日本社会における藤原審爾の位相

—「中間雑誌」からみる「暴力」と「性」—

The Phase of 1950s Postwar Japanese Society Highlighted in Shinji Fujiwara's Fiction
“Violence” and “gender” published in a middlebrow magazine

岩 元 省 子

Shoko IWAMOTO

(日本女子大学大学院人間社会研究科 現代社会論専攻博士課程後期)

要 約

本論文は「中間雑誌」『小説公園』（六興出版社）に発表された、藤原審爾「裏切られた女達」を素材に、新たな戦後史を構築する試みである。藤原は1947年、雑誌に掲載された「秋津温泉」で文壇デビューを果たし、戦後は「中間雑誌」に活動の中心をおいて作品を発表し、一躍流行作家となった人物である。彼が描く小説は、純文学から大衆小説まで幅広いものであった。本研究では、戦後日本社会における「性暴力」がテーマとなった小説「裏切られた女達」を歴史史料と捉え、作品の概要、本作品が提起する諸問題、同時代における小説の位相などを分析する。作品の主軸となる占領軍による「性暴力」の被害に遭った「日本人女性」に関する藤原のまなざしから、戦後日本社会において「裏切られた女達」が発表されたことで、藤原が小説の中で描いた社会の周縁に位置づけられる人々の代弁者としてどの程度可能か目指す。本研究は、戦後流行作家となり作品集も刊行されながら、従来ほとんど注目されてこなかった作家、藤原審爾と「裏切られた女達」を軸に戦後史の叙述様式自体の再検討を試みるものである。

[Abstract]

This paper examines postwar Japanese society through Shinji Fujiwara's fictional series, *Uragirareta Onnnatachi* (“Betrayed Women”) was published in the middlebrow magazine *Shosetsu-Koen*. Fujiwara began his career as a professional writer with the novel *Akitsu-onsen* (“Akitsu Hot Spring”) in 1947. He was one of the popular writers of the time with a writing style ranging from *Junbungaku* (serious literature) to entertainment fiction. Through Fujiwara's writing, this paper focuses on the different types of violence that surrounded people at the periphery of society in 1950s postwar Japan. In addition, this study analyzes Fujiwara's perspective of these people and why he published this series of fiction in middlebrow magazines. The first chapter analyzes the general description of *Uragirareta Onnnatachi* given in *Shosetsu-Koen* between 1955 to 1956. The second chapter highlights the issues that the fictions exposed to the public. The third chapter studies Fujiwara's narrative style in a series in *Uragirareta Onnnatachi* concerning women who contacted G.I.s (General Headquarters' Soldiers). By examining these topics, this paper aims to ascertain the possibilities whether Fujiwara come to be the voice of these social minorities. As there has been little discourse or study on either Fujiwara Shinji or *Uragirareta Onnnatachi*, this paper will offer a new metahistorical narrative on postwar Japanese society

はじめに

「娼婦は、戦争孤児や闇市場の商人とともに、戦後まもない時期の日本の世相の象徴であった。(中略)「パンパン」の名で知られていた占領軍兵士相手の街娼たちは、その生意気ぶりや因習にとらわれない性格も含めて、世間から大いに好奇の目を向けられていたようである(後略)」¹ マイク・モラスキーは『占領の記憶／記憶の占領』(鈴木直子訳、青土社、2006年)中でこのように述べる。

前述のモラスキーの表現において登場した「パンパン」²については、戦後史研究のなかでも、今日では特にジェンダー史において「暴力」と「性」に着目し、多くの研究が存在し深められつつある。恵泉女学園大学平和文化研究所編『占領と性－政策・実体・表象－』(インパクト出版会、2007年5月)では、8・15以後という戦後平和的な言説に疑義を提し、1952年4月28日に被占領から脱した日を日本の独立記念日と捉え、抹殺された占領期を対象に既成の占領史観を問い直す七つの論稿が収められた研究である。それは二つのパートからなり、第一部(四稿)³は「政策と実態」を、第二部(三稿)⁴では「意識と表象」を軸に論稿が収められている。平井和子は日本占領とジェンダー 米軍・買春と日本女性を対照とし、地方都市の「特殊慰安施設」(RAA)における実証的研究を行い、占領期の「性政策」を地方史における史料を中心に研究を行っている⁵。そこで平井は米軍主導の日本占領をジェンダー視点で問い直し、軍隊が占領を維持するために必要とした兵士の買春政策を組織的性暴力と位置づけ、軍隊を支える女同士の関係性が売春禁止運動をきっかけとして分断される構図も明らかにしている。茶園敏美による『パンパンとは誰なのかーキャッチという占領期の性暴力とGIの親密性ー』(インパクト出版会、2014年9月)では、「パンパン」への社会のまなざしやGI(米兵)との関係性、性病検査のため強制連行される通称「キャッチ」＝「パンパン狩り」という人権を無視した性暴力に焦点をあて明らかにするものである。

敗戦そして占領の一時期に位置する1950年代の戦後日本社会では、「未亡人」、「帰還兵」、「戦争孤児」、「GIベビー」といった敗戦経験や占領／被占領を象徴する多くの表象が小説においても語られる。本稿では以上の先行研究と「占領」と「性暴力」という戦後日本社会が体験した占領／被占領という社会構造における出来事の共通性を持ちながらも、1950年代において流行作家であり著作集⁶も刊行した藤原審爾の時代性に着目し、戦後日本社会における占領期／占領期後における「性暴力」がテーマになった「裏切られた女達」『小説公園』⁷を素材に、第一章では作品の概要を提示し、第二章では作品が提示する諸問題を明らかにし、第三章においては「女性達」を裏切った主体に関して省察を行う。

最後にこうした考察結果をふまえ、藤原が戦後日本社会において「裏切られた女達」の作品を発表することは、彼がこの性暴力被害に遭った「女性達」の代弁者としていえることがどの程度可能かどうか明らかにする。

1 「裏切られた女達」の作品構成

1-1 発表形式

「裏切られた女達」は、「中間雑誌」といわれる『小説公園』において一九五五年の一月号から始まり、翌年の一九五六年十二月号の期間において毎号(三月号を除く)掲載された二十三編からなる連載小説である。この小説は二部構成となっており、第一部の十二編を一九五五年一月号～十二月号に、第二部の十一編を一九五六年一月号～十二月号に発表している。第一回の掲載号の目次では小説の内容が一目瞭然となるキャプションが記載されている。それはタイトルの横に「アメリカ兵のために踏みにじられた日本の乙女の血と涙で描く汚辱の歴史！作者が異常な情感と激情に織る新連載読切！」⁸という生々しい言葉が並ぶものとなっている。後にこの連載が改題され『みんなが見ている前で』と単行本化⁹され出版された際には、その副題に「占領下日本女性受難の記録」と作品内容が一目瞭然となるものが付されることとなる。

「連載読切」という形式をとった小説であるが、第一部と第二部ではタイトルの変化が見られ、第一部の作品のタイトルは全て「裏切られた女達」であり、副題に小説の時代背景となる年代ならびに主人公の女性の氏名の両方が記される。一方、第二部では、「裏切られた女達」(第二部)が副題となり、毎号異なるタイトルに変化する。一部同様に、主人公の女性の氏名、作品の背景となる年代が付されることに変化はない。第一部、第二部とも作品の舞台となる時代は、戦争末期―敗戦―占領期―占領期終了後の連続する時間軸で描かれ、それぞれの作品は時系列で毎号一年ずつ時代が進行する構成となっている。(作品概要は、添付資料2を参照されたい。)

1-2 描かれた女性たち

作品の中で描かれた様々な背景をもつ女性たちは、十代から二十代未婚の「日本人女性」達である。生活が苦しく奉公に出されている女性であり、戦争で父親を亡くし一家の生活を支える収入を絶たれた女性であり、また敗戦後結婚したばかりの新婚女性達であった。特に目を引くのは、小説の時代背景が、敗戦直後の昭和二十年～二十三年頃の作品において十代後半の貧しい女性達が奉公先で占領軍兵士たちによる性暴力の被害者となり「パンパン」に転落するさまが描かれることである。第一部一九五五年一月号の主人公「入江松子」は年代設定が昭和二〇年の作品であるが、主人公の年齢は当時一六歳である。同年二月号作品の設定年代は昭和二十一年であり、主人公の「飯島しず子」は一八歳となっている。さらに同年十二月号では、一九五五年二月号と同じ昭和二十一年となり、主人公の「田部花子」は十八歳である。第二部の作品の一九五六年一月号の「青木光子」が主人公となった作品では、再び昭和二十一年となり、主人公の年齢は十八歳である。つまり、戦争末期から敗戦直後を描いた作品群では十代中～後半の女性達が描かれ、昭和二十一年が時代背景となった作品が三編も収録されていることになる。

より詳細に考察すると、一九五五年一月号の「入江松子 昭和二十年」¹⁰の作品は、戦争末期の正月から物語がはじめられる。千葉の房総半島の漁村出身である松子が東京品川の軍需工場に出稼ぎに出され敗戦を迎えたあとの性暴力に遭い「パンパン」になるまでの過程が描かれる。空襲により工場は焼失し、敗戦を迎えた松子は、同郷の友人「智子」とともに築地に故郷まで帰れる船を捜しに行く。しかし、船は見つけられず勤めていた工場の女子寮へ帰路の途中、トラック

にのつた占領軍兵士3～4人に学校の敷地内に連れ込まれ性暴力の被害に遭う。その時の暴行により智子は死に、半死状態となった松子は日本人の男性に助けられ一命を取り留める。松子が数日経って怪我から回復すると、助けた日本人の男は怪我の治療代や衣食を与えた恩を着せ、「お金が返せないのなら体で返せ」と迫まり、GI¹¹相手の「慰安所」¹²に売り飛ばされてしまう。この作品では、戦中に銃後を守る「女子挺身隊」として駆り出され、敗戦後もいわゆる「女子挺身隊」としてではあるが、今度は同じ日本女性の「貞操」を占領軍兵士から守るために「性労働」に従事させられた貧しい漁村出身の女性が描かれたものである。

同じように、同年二月号の「飯島しず子」の場合は、しず子が病院の院長宅に女中として奉公している時に、十人ほどの占領軍兵士により、病院に勤めている看護師や入院している患者、そして隣近所四軒の家庭の主婦や娘たちと共に集団で性的暴行を受けたことがきっかけで、彼女が「パンパン」に「転落」するさまが描かれる。被害に遭ったしず子は、病院の閉鎖に伴い解雇されその後実家に帰るも、奉公先での事件が近所でうわさとなり、地元の男性達からも「どうせアメ公にやられたんなら……」と因縁をつけられ断りきれず、弄ばれてしまう。占領軍による性暴力の被害が、負の連鎖となり描かれている。作品のなかで、「凌辱の過酷な意味にたえかねて、家出をした。神戸へいった。その悲惨な意味から、逃れるために、進駐軍相手のパンパンになった」¹³と記されそこで物語は閉じられる。

「入江松子」、「飯島しず子」と十代の女性たちが作品の主体となり、二人の結末は、占領軍兵士を相手に売春行為を生業とする結末になる。戦時中においても、当時社会の底辺で必死に生活をしていた女性たちが、敗戦を経験し占領軍が彼女たちの生活圏に入り込むや、戦中より酷い過酷な環境へと彼女たちを落とし込む。彼女たちにとって戦争は継続している状況が描かれているのである。

1-3 序文が意味するもの

「裏切られた女達」の作品において当時藤原が知り得た、或いは手にすることが出来た資料に基づく文言が小説の序文として書き記される。そのことはこの連載が『みんなが見ている前で』（鱒書房、一九五五年八月）と改題され単行本化された「あとがき」¹⁴に書かれていたことから確認できる。そこで藤原は「(前略)わたしに資料を与えて下さった方、わたしより以前この問題について著作や手記を発表された方たちの作品ということが出来ると思います。(後略)」と記している。

序文は小説の伏線として、作品の時代背景に即した敗戦後における政策やそれに伴う社会情勢が言及されているものである。先述した一九五五年の一月号の「入江松子」の作品の序文を例に挙げると、内容は以下のようにになっている。

昭和二十年

八月十七日、内務省・外務省・厚生省・警視庁等の局長会議において、占領軍による治安の乱状を防止するため、全国の公娼施設を総動員して之にあたらせる件が了承された。九月一日、売春業者・警視庁・勧業銀行・占領軍側等の会合において、同年、進駐予定の占領軍五十万のため、現存の売春婦約一万三千人のほか、一般より新たに勧誘して計五万人を確保

すること、之に関する勸業銀行側の出資は全資金の十分の七以上に該当する二千四百万円以上であること、之に対する警視庁側の協力態度等が了承された。治安の乱状を防止するため、全国の公娼施設を総動員して之にあたらせる件が、了承された。

一九四五年八月十五日から二日後、当時の日本政府が真っ先に実行した政策は、占領軍兵士から「良家の子女」を守るために特殊慰安施設協会(Recreation and Amusement Association 通称 RAA)¹⁵と呼ばれる占領軍兵士向けの「娯楽施設」の設置であった。政府は「日本女性の貞操を守る犠牲として愛国心のある女性」を募集し、占領軍向け慰安所を各地に設立する。「入江松子」の小説で描かれた「性暴力」の背景に、松子が働いた「慰安所」というのもこの国内における占領政策を反映して関連づけ描かれているのである。また、この序文は一九五五年十二月号の「田部花子」の作品においても同じ内容で使われている。

藤原は、歴史的事実を織り交ぜながら作品の物語を編んでいく。発表された一九五五年という時代において、おおよそ十年前の出来事を織り交ぜながら人びとの記憶が曖昧になるかならないかの時期に、現実感を伴う序文を効果的に演出の一つとして作品の中で使用していたのである。

2 「裏切られた女達」が提起する諸問題

2-1 「凌辱行為」、「凌辱」という言葉

「はじめに」の箇所であげた先行研究と本研究の位置づけは、戦後日本社会における「暴力」と「性」を軸にした共通性があると述べたが、異なる点として、同時代における男性流行作家の視点により描かれた小説作品を素材にしたことである。そのことにより、意識的であれ無意識的であれ作品から①男性視点が具現化し、②作品を受容する側の位相も明らかとなり、③さらに作品が発表された媒体の特徴が浮き彫りになることがいえよう。

藤原審爾は、一九二一年東京に生まれた。四歳の時に母親と生き別れ、七歳で父親と死別し、その後父親の実家のある岡山にて祖母に育てられた。一九四〇年、青山学院高商部に進学するが、肺結核で中退している。文壇デビューのきっかけとなった「秋津温泉」は一九四七年に雑誌に発表されたものである。藤原は戦後の「中間雑誌」の興隆にともない、中間小説を数多く手掛けるようになる。藤原審爾は「秋津温泉」といういわゆる純文学作品で文壇デビューを果たしたわけだが、戦後は主に「中間雑誌」に意欲的に作品を発表し、幅広い作風で「小説の神様」とも称されるようになった。(藤原の主たる創作活動は添付資料1を参照されたい。)

「裏切られた女達」の軸は、「性暴力」の被害者である「日本人女性」であることは第一章において言及したとおりである。この「性暴力」の描写が作品中では、藤原は「凌辱行為」という文言で綴り、その行為の描写は、女性たちの肉体が占領軍兵士によりいかに乱暴に扱われたか、むごたらしく描かれる。

一九五五年六月号「伊丹敏子」の作品では、敏子は「オンリー」¹⁶であったが、ある日付き合っていた兵士が家に帰ってくるなり突然殴る蹴るの暴力を振るい、半死半生になり、しまいには敏子が床に伸びて動けなくなった足をつかんで玄関の外に引きずり出してしまう。さらに三年前の彼女が十六歳のときに受けた占領軍兵士複数による「性暴力」が叙述される。彼女が横浜で外

務省の役人の家で奉公している時に、複数の占領軍兵士がその役人の自宅に突然現れ、役人の妻と敏子が被った事件である。藤原が描いた敏子が負った肉体の傷は、一生彼女を苦しめるものとして描かれる。それは、「オンリー」になった後でも相手の兵士から「お前の恥部は片輪だ」となじられる叙述から確認できる。

また、「凌辱行為」或いは「凌辱」という言葉は、「裏切られた女達」の一連の作品では、切り離すことのできない用語となっている。一九五五年三月号「三輪綾子 昭和廿二年」の作品では、家が基地のそばにあったため両親が「パンパン」に貸間した娘の身に起こった「性暴力」＝「凌辱行為」として叙述される。綾子は顔見知りの洋娼からGIが運転する車と一緒にドライブに行こうと誘われ、同乗する。その結果、綾子は占領軍兵士にとある旅館に三日間監禁され合計十三人もの兵士が入れ替わり立ち代わりその部屋を訪れ、「凌辱」されたことが描かれる。フィクションとはいえ、一九四七年を背景としたこの作品は、かなり過剰な演出がされているのではないだろうか。当時普通の一般女性が三日間も監禁され、その間「凌辱行為」が十三人という占領軍兵士たちにより行われていたという物語は、あまりにも非現実的であり、綾子の両親や警察が騒がないわけではないと考えられる。この過剰な演出によってエンターテインメント性が全面に押し出され、藤原の被害者女性に対する寄り添う気持ちは薄れるものになっている。

また第二部一九五六年六月号「酔どれと娼婦 大森絹子 昭和二十五年」の作品では、五歳と二歳の子供二人と夫がいる前で、妻が三人の占領軍兵士により乱暴される状況など、藤原が描写する「性暴力」は、「凌辱行為」という言葉が、その「暴力」と合致する最も適切な言葉として使われるのである。

2-2 藤原の問題意識

藤原の占領軍兵士による日本の女性たちへの「性暴力」に関する問題意識は、小説作品以外でも公表されている。一九五五年十二月号の『婦人公論』において彼は、「貞操と人権―人妻強制検診事件―」¹⁷と題する論説を寄稿する。そこでの彼の問題意識は、当時横浜市金沢区に住む妊娠九ヶ月への横須賀市衛生課員の男性による強制検診を人権蹂躞事件として問題を提起しているものであった。占領期、アメリカの横須賀海軍病院では性病に罹った兵隊を治療する際に、交渉した相手の名前を申告させる。その申告(真実かどうか関係なく)にもとづき、横須賀市が強制検診を行うのである。もちろんこの妊娠九ヶ月の人妻は検査の結果、「異常なし」である事が分かったが、彼女は検査料を請求されたうえ、再診のために次週来るように言い渡された。夫が事情をいろいろ調査し人権侵害で横浜地方法務局に訴えを起こしたものであった。藤原は訴えを起こした側の正当性を擁護すると共に、彼自身が調査した進駐軍による凌辱事件における個人的徹底抵抗は、有効な場合があると強調する。と同時に、横浜法務局の「本省の指示を仰ぐつもり」という姿勢に、当該局の主体性のなさ、当時の人権侵害に関する意識の脆弱さを批難するものとなっている。

また、翌年の一九五六年『知性』五月号において藤原は「日本の女には「人権」はない―「基地」による女性の人権侵害―」¹⁸という論説を寄稿し、次のように述べる。「駐留軍による暴行にたいして、実際、私たちは充分に身を守るだけの力を持っていない。敗戦直後からの数年間というものは、外国将兵による暴行は、占領目的違反という名目で公表することも告訴すること

も許されなかった。ただ泣き寝入りするよりしかたがなかったものである」と当時の日本女性に対する占領軍兵士や占領政策への怒りを表している。

しかしながら、「裏切られた女達」における藤原が使用した「凌辱行為」という言葉は、当時どのような文脈で使われていたのであろうか？ この言葉が繰り返し使われることに対して当時の女性の読者は、この作品を「娯楽的読物」として受容できたのか推察すると、そうではないと言えよう。つまりこの作品は、男性向けに編まれた作品として位置付けられる。何故なら、「裏切られた女達」が「凌辱」されることが描かれたこの作品群では、男性が女性を辱める行為であるからである。物語の主人公は「女性達」であっても被害者の立場が必然となり、男性主導の加害が浮き彫りとなるものである。当時「中間雑誌」が大衆の娯楽の一つとして位置付けられていた事から、「凌辱」なる言葉は、現代において使われる「強姦」や「レイプ」と同じ内容の犯罪であるが、当時はその言葉より「凌辱」という表現の方がいくらか和らいで、カストリ雑誌の中で描かれるような「エロ」を想像させる表現といえよう。つまり、藤原の問題意識は、先の『婦人公論』や『知性』での発言とは裏腹に、「凌辱行為」という言葉を繰り返し作品のなかで使うことが、女性たちの悲劇を占領期における「不当な扱い」として描いたとしても、読者は「性的」な描写のある作品を作者の意図とは違う次元で、享受していたと考えられる。さらにこの作品が掲載された『小説公園』という雑誌は、「中間雑誌」であり戦後の娯楽に飢えていた人々に大いに支持された雑誌である。つまり娯楽雑誌に発表された「裏切られた女達」は、作者の占領期における占領軍兵士による「暴力」への怒りとは別に、大衆には「性描写」が登場する「娯楽」読み物のひとつとして受容されていたことが同時代におけるこの作品の位相といえるのである。

2-3 作品が発表された1955年という位相とプレス・コード

プレス・コードは、敗戦直後から連合国軍の占領期間である一九五二年に講和条約が発効されるまで、連合国軍総司令部(General Headquarters 以下 GHQ)の民間諜報局(CIS)、民間検閲支隊(CCD)、出版・演芸・放送課(PPB)が、占領開始とともに日本社会における様ざまメディア(新聞・雑誌・映画・演劇・放送)に対して、事前・事後の検閲を行ったものである。『小説公園』において藤原審爾の「裏切られた女達」の連載が始まったのは、一九五五年の一月号からである。つまり藤原がこの作品を発表したのは、占領解放後の約三年後ということになる。本来なら占領期における「性暴力」の実態を明らかにしたい問題意識を持つならば、占領終了後の一九五二年四月二十八日以降、すぐにでも発表できたはずである。

戦後日本社会における一九五〇年代に何があったのか政治的な出来事に着目すると、一九五〇年六月に朝鮮戦争がはじまり、多くの占領軍兵士は、朝鮮半島に徴用され、国内にいた占領軍兵士の数は、徐々に減少傾向となる。また一九五二年四月、対日平和条約、日米安全保障条約調印、一九五四年五月にMSA 調印¹⁹、そして同年六月には自衛隊（前身は警察予備隊として1950年発足）の発足がある。このように、国内において朝鮮戦争により占領軍の数が激減し、占領期における「女性達」への性暴力とともに減る一方、プレス・コードによる検閲もないが、軍事援助に関する協定が結ばれ、自衛隊の発足という一連の被占領国から脱した三年後、藤原は作品を編んでいく。

一九五五年と一九五六年の十月号の二作品における序文では、MSA 調印に関する文言が序文に付され、藤原の作品の時代に敏感に反応する作品が発表されることとなる。また、一九五五年十一月号では作品中に登場する「パンパン」が米軍兵相手では稼げなくなり、自衛隊基地のある地方に引っ越していくさまが描かれる。このように作品を当時の出来事と関連づけて描くことは、物語にリアリティを持たせる工夫と捉えられるが、一方社会でのこうした環境や出来事に対する藤原の器用さと敏感さは、「裏切られた女達」が三面記事的な位相をもって、作品をよりエンターテインメント化させ藤原の問題意識とは異なる受け取り方を読者はしてしまう可能性があると言える。

3 「裏切った主体」

3-1 描かれた「日本人男性」

「裏切られた女達」において特徴的といえるものに、占領者側の性暴力だけでなく、被占領者側である「日本人男性」による「日本人女性達」への「裏切り行為」も描かれる。一九五五年一月号の「昭和二十年 入江松子」の作品では、軍需工場の寮長による夜逃げにはじまり、松子が暴力を受け瀕死の状態のときに助けた日本人男性の「裏切り」も物語に登場する。彼は、「進駐軍慰安所」を経営していた暴力団の組長であり、一人でも多くの「慰安婦」を集めるため、たまたま占領軍による暴力被害に遭った松子のもとにあらわれ、親切を装いながら彼女が気を許すように最初は甘言によって励まし衣食住の世話をし、回復したら、彼女の世話に掛かった費用を請求し、彼女が「慰安所」で働かざる得ない環境に追い込むといった過程も描かれる。

また一九五五年五月号の「昭和二十四年 戸部典子」の作品では、敗戦後中国人と共同で中華料理店を立ち上げ経営に成功した主人「木村」が、典子というお嬢様育ちの女性をいつの間にか高級娼婦に仕立て上げるさまが叙述される。木村は戦前勤めていたホテルの経営者の娘典子を「アメリカの将校が日本の上流階級の女性と話がしてみたいと言っている」、と言葉巧みに誘い出し、典子の肉体をその将校に好きなように弄ばせるのである。お嫁に行くことができなくなったと悲しむ典子に、木村は謝罪をするため頻繁に彼女の自宅を訪れ、普通では手に入らない進駐軍の品やパーティに誘い出し、彼女のプライドを満たし、贅沢な環境を与え、いつの間にか典子を外国人専用の娼婦に仕立て上げる過程が描かれる。

この作品において、描かれた「日本人男性」は、「日本人女性」を絶望の縁に立たし弱みを利用した存在として描かれる。特筆すべきは、作品の前提として藤原が、女性を弱者としておき、その運命に抗する力を持たない存在と位置づけていることである。藤原は、「裏切られた女達」において占領軍だけでなく、「日本人男性」の裏切りも描こうとした作品であると言えるが、同時に、無力な存在として「女性」を見ているまなざしが明らかとなるものである。

3-2 描かれた「裏切った組織」

藤原は、組織ぐるみの占領期における「日本人女性」に対する「裏切り」ともとれる出来事も叙述している。一九五六年一月号「昭和廿一年 青木光子」の作品においては、「軍の命令」ということで本土決戦に備えて女子軍の新設のために集められた女性達の徴用をめぐる政策が登場

し、そこでは、主人公光子が所属する隣組の組長命令で、戦争末期に女子軍として光子が代表で村から選出される様子が語られる。しかし、東京が焼け野原となり、女子軍は三々五々6人ずつに分けられトラックに乗せられて、見張りの監視付きで行先も言われないまま運ばれることとなる。「諸君は女子特攻隊として直ちに指定の場所におもむき、たえがたきをたえて、全日本婦人のたてとなるべし」と内務省から命令が下されたと作品では叙述されるのである。つまりRAA設立に伴った「日本人女子」の徴用が描き出されるのである。

さらに一九五五年七月号「昭和二十六年 井口春枝」の作品において、朝鮮戦争の勃発に伴い九州の久留米にある地元農家では、農地が占領軍に没収され田園の補償金も届かない有様が描かれる。地元の農民たちは軍用道路の工事に駆り出され、薬きょうを拾う仕事などに就くようになる。占領軍目当てに「パンパン」たちがどこからともなく集まってくるようになり基地周辺の物価は高騰し、農民たちも「貸間」業などを始めるようになる。村の様子が一変に様変わりし、農家のなかには自分から田畑をつぶし家屋を建て貸間業で生計を立てようとする者も出てきた。しかし朝鮮戦争がおわり、占領軍兵士も次々に帰国していくなか、基地化された地元の景気は一気に悪化し途方に暮れる元農民の姿が描かれるのである。

藤原は、裏切った主体を占領軍だけに絞らず、当時社会の中で同じように被占領経験を共有していた「日本人男性」や、軍国主義のなかで結成された隣組という組織を登場させながら、当時の「裏切られた女達」における多重的な「暴力」を描いている。作品が編まれた一九五五年、五六年という当時国内における社会的位相を考えると、フィクションとして人々の占領期の記憶は新しく、この小説に身体性を半分持たせつつも、分かりやすいプロットに「娯楽性」を見いだせるものとなっている。

結びにかえて

「中間雑誌」『小説公園』に掲載された藤原審爾「裏切られた女達」を素材に、1950年代の戦後日本社会における藤原審爾という作家の位相を検討し、彼が当時社会の周縁に位置していた「日本人女性達」の代弁者としてどの程度なり得るのか、考察を行った。

第一章では、「裏切られた女達」の作品構成から、小説の形式、描かれた女性たち、そして序文を中心に提示した。発表当時の編集者の作品に対する意気込みが目次ページのキャプションに表れ、二部構成による作品は、第二部編ではタイトルの変化があったことである。作品の時代背景もクロノロジカルに毎号一年ずつ展開していくものであった。描かれた女性達は、当時社会的弱者であり、十代から二十代前半の女性であることが分かり、特に敗戦直後の早い年代に於いては、十代後半の女性達が、占領軍兵士による「性暴力」の被害者として描かれているものであった。彼女たちは、心身ともに深い傷を負い家族の援助も頼れず占領軍兵士を相手に売春して生活していく道を選んでしまう。敗戦後の日本に訪れた平和という言説を覆すさまが描かれていたのであるが、小説における序文において、当時の社会的出来事が反映されたことなど踏まえると、読者の被占領体験の記憶の生々しさと曖昧さを加味した叙述が一層作品にエンターテインメント性を持たせる結果となっていることが明らかとなった。

第二章では、「裏切られた女達」が提起する諸問題に関して論じた。藤原審爾という当時流行

作家であった彼が描いたものには、「凌辱行為」という言葉が何度も繰り返し使われ、このこと自体男性視点による叙述によるものであり、「凌辱」という言葉自体当時娯楽性をもった「性描写」につながる言葉として女性視点の欠落が浮き彫りになるものであることが分かった。藤原自身が、占領期における問題意識を、他の雑誌において「人権問題」に特化し論稿を寄せていたが、「裏切られた女達」が発表された『小説公園』は、「中間雑誌」であったため、同時代に於いては「娯楽性」が全面化してしまい、藤原の問題意識とは別な次元で読者に受け取られていたことの可能性が出るものと分かった。加えて作品が発表された1955年という時代を見ると、朝鮮戦争により国内における占領軍の数も激減し、MSA 調印や、自衛隊の発足という再び戦争の影が落とされる背景があった。社会問題を作品に直接的に反映させる効果は同時に「娯楽」性をも強調させてしまい、藤原の問題意識は半減するものであると分析した。

第三章では、「裏切った主体」と題し、占領／被占領の社会構図のなか、当時社会の底辺に位置していた(してしまった)女性達を陥れたものが占領軍以外で何があったのか、省察した。そこには、被占領者である「日本人男性」があり、戦時中の軍国主義によって形成された組織による協力があり、「裏切られた女性達」の位相が複雑な環境であることが分かった。

藤原審爾は、占領軍による「日本の女性達」への「性暴力」を二十三編からなる小説に描いた。この「性暴力被害者」である女性達は、同時代における戦後日本社会の「サバルタン」として位置づけられる。藤原は、作品叙述に於いて男性視点による描き方や、発表媒体の「娯楽性」などにより十分な代弁者になり得なかったことが、以上の研究により提示できた。最後にこの問題は、ポストコロニアリズム研究におけるスピヴァックの「サバルタンは語ることが出来るのか」という問題に通ずるものがあると言えよう。これに関してはまた別稿で考えたい。

資料 1

藤原審爾略年譜

年	事 柄
1921	東京府本郷に生まれる
1924	母と生別
1928	父と死別、父の郷里である岡山県片上町の父の生家で祖母に育てられる
1940	上京。青山学院商学部に入學したが肺結核で中退、岡山で療養生活に入る
1945	岡山大空襲の際、吉備津に疎開。同人雑誌『文学祭』を発刊、中心人物になって執筆活動が続ける
1946	『文学祭』に発表した作品が外村繁に認められ、しばしば上京し彼に師事する 外村の推挙で「永夜」を『新潮』に発表
1947	「破倫」を『素直』に、「秋津温泉」前半を『人間』別冊に、後半を『別冊文藝春秋』に寄稿。「秋津温泉」は、岡山県の奥津温泉の温泉宿を背景に、両親のいない少年を主人公にカリエスを病む美少女直子や生命に溢れる新子への思慕を描く抒情作品で、戦後高い評価を得る
1948	上京しデカダンな生活を送るうち病氣再発、入院。闘病の間にも私小説「摩子を待つ間」ほか多作し、次第に私小説作家から風俗小説に転じ、流行作家になる。 『秋津温泉』（講談社）出版
1950	二度の大手術を受ける
1952	入院期間中に、殺人罪で服役中の亭主を待つ芸者と新聞記者との悲恋を描いた「罪な女」ほかで直木賞受賞。この頃日ソ図書館の文学学校や中央労働員の講師、雑誌『文学の友』（旧『人民文学』）の編集委員を務める
1955	占領軍による暴行、凌辱事件を扱った「裏切られた女たち」第一部を『小説公園』に連載
1955	「裏切られた女達」の単行本を『みんなが見ている前で』（鱒書房）と改題し、「正」を8、10月に、「続」を11月に出版
1956	『裏切られた女達』（大日本雄弁会講談社）出版
1957	『藤原審爾作品集1～3』（森脇文庫）
1958	『藤原審爾作品集4～7』（森脇文庫）
1959	推理小説『赤い殺意』（光文社）出版
1962	「殿様と口紅」で小説新潮賞受賞
1962	「秋津温泉」が松竹にて岡田茉莉子の企画・主演・吉田喜重監督で映画化
1968	『新宿警察』（報知新聞社）発表
1975	作品集『藤原審爾その華麗な世界 内幕小説みんなが見ている前で』、双葉社より出版
1978	自選作品集『永夜ひたむきな女たちの物語』（徳間書店）
1984	肝臓癌で入院し、4ヶ月の入院生活後に永眠

資料 2 藤原審爾「裏切られた女達」『小説公園』(六興出版社)

作品 番号	掲載年月 タイトル	背景	暴力の実態	占領軍/在外日本人	描かれた日本人	用語	その他	単行本掲載
1	1955年 第一部 1月号 昭和二十年 入江松子	・品川の軍需工場に駆り出される (44年正月) ・敗戦後工場封鎖。	・友人と共に帰宅途中六人の米兵により路上で誘拐され学校の教室で強姦される。 ・隣近所四軒も被害 ・実家での日本人男性たちによる性暴力。 ・繰り返し性暴力から逃れるために進駐軍相手のパンパンになる。	・十人ほどの米兵 ・MP	・敗戦後寮長の夜逃げ ・警官 ・やくざの親分 ・女将	・大森の進駐軍慰安所	松子 16歳	「売春動員」「みんなが見ている前で」
2	2月号 昭和二十一年 飯島しず子	・名古屋にある産婦人科病院で女中奉公。	・名古屋にある産婦人科病院で女中奉公。 ・隣近所四軒も被害 ・実家での日本人男性たちによる性暴力。 ・繰り返し性暴力から逃れるために進駐軍相手のパンパンになる。	・十人ほどの米兵 ・MP	・近隣の人達は初めは見てみぬふりをしたが、結局警察へ通報 ・「暴行容疑」「占領目的違反容疑」で日本人が逮捕される ・性暴力を受けたことを理由に近寄る男性達	・「スペシャル・メイド」	しず子 18歳	「みんなが見ている前で」「みんなが見ている前で」
3	3月号 昭和二十二年 三輪綾子	・岡山の練兵場の前にある実家 ・「パンパン」に貸間する。 ・休日の買い物帰りに三人のパンパンと遭遇、その内一人「アニイ」と占領軍とのドライブ誘われ、断りきれず出かける。 ・事件後一家は京都に引っ越す。	・ドライブに誘われ車に乗った後、連れて行かれた旅館で三日間拘束され十三人の「ハロー」から乱暴される。 ・京都で「パンパン」になり一人二千百円の手当をもらう。	・「ハロー」	・無盡會社外交員の父親／文房具屋店員の弟／親戚の小母さん ・「オンリー」のパンパン ・京都でパンパンに下宿させる戦争未亡人 ・「パンパン」の組合が作成したパンフレットでの紹介記事	・「スペシャル・メイド」 ・「パンパン」 ・「パンパン・ハウス」 ・キャッチ ・平安病院	綾子21歳	「ゆがんだ抵抗」 「みんなが見ている前で」
4	4月号 昭和二十三年 三好定子	・出産した子供は、黒人兵に犯された際にできた子供だったため「死産」として扱われる。 ・出産後妻の家出。新宿でパンパンになり、結婚しようと思っていた占領軍兵士から「パンパン」だといわれキャッチされる。	・学校でのバーティの帰り道、兵士に乱暴される。		・婿養子に入った男は、妻の家出により「裏切られた男」となった。	・「スペシャル・メイド」 ・「オンリー」 ・「キャッチ」	女学校卒業後すぐ	「路上の惨状」 「みんなが見ている前で」
5	5月号 昭和二十四年 戸部典子	・空爆で経営していたホテルと父を失い、自宅は進駐軍にとられる。生活のために貸間した女性が「パンパン」であった。 ・元支配人の男性の口利きでいろいろな外国の男性を紹介され終いには高級娼婦となる。	・警官とMPによる突然の自宅への荷り込み。 ・映画会社の人物による乱暴。 ・貿易商	・将校に凌辱され病気をうつされる。 ・映画会社の人物による乱暴。 ・貿易商	・戦後中国人と共同で中華料理店を成功させた元使用人の男性。 ・外国政府高官	・「パンパン」		「CSガール」「みんなが見ている前で」

作品番号	掲載年月 タイトル	背景	暴力の実態	占領軍／在日外国人	描かれた日本人	用語	その他	単行本掲載
6	6月号 昭和二十五年 伊丹敏子	・戦災孤児で「オンリー」として生活をしていたがある日暴力を振るわれ家を追い出される。 ・「パンパン」となり懇意になった日系の占領軍兵士と共に脱走。 ・実家周辺には基地がつくられ身の危険を感じた娘たちは周旋屋のすすめで街に働きにでるが、勤め先は想像していたものではなかった。 ・いつの間にか六万円の借金がつくれ「パンパン」として働かされる。	・数人の占領軍兵士による横浜での奉公時代の性暴力。 ・脱走中MPにより射殺される。 ・戦車により田畑は荒らされる。	・日系二世ハワイ出身の兵士。 ・朝鮮行きが決まった兵隊たちによる性暴力。	・外務省の役人 ・農家の人びと ・女工の周旋屋 ・「パンパン屋」の女将 ・「パンパン屋」の用心棒 ・茶店の親父 ・茶店の客	・朝鮮戦争 ・府中の「ハウス」	敏子16歳の時に「性暴力」をうけ、三年後には「オンリー」になっている。	「脱走兵」「続・みんなが見ている前で」
7	7月号 昭和二十六年 井口春枝					「パンパン屋」		
8	8月号 昭和二十七年 小川勝子	・戦争で家を焼かれ、父親は戦死し、母親・弟と戦災者住宅でくらしていた。 ・生活のために客引きをする ・結婚まで約束していた元占領軍兵士に捨てられる。 ・富士吉田の友人の「パンパン」を訪ねる。	・富士吉田の占領軍兵士が子供に乱暴するのを止めようとして大やけどを負う。	・除隊し、軍関係の自動車修理工場に再就職、景気がよくなり浮気をする。	・小学生 ・貸間した大学生			「アメリカへ行った女」「続・みんなが見ている前で」
9	9月号 昭和二十八年 山本美代子	・浮気現場を見られゆずられる。	・二世の兵隊あがり車で車のプロローグ。	・プロローグによる口利きで流行歌手が円満に離婚できるように彼の妻に浮気相手を紹介する。	・流行歌手とその愛人	「ムスメサン狩り」		「白人の天国」 「続・みんなが見ている前で」
10	10月号 昭和二十九年 内川千代	・夜自宅で睡眠中に占領軍が強盗にはいる。 ・東京に家出をするが、酒場につとめるもマダムから客をとるようすすめるられる。	・三四人のGIが実家にあらわれ父親のいる前で性暴力をはたらく。		・銃声に気付き駆けつける近隣住人、警察官、婚約者 ・近所の白い目 ・好意を寄せていた男性からの仕打ち		・MSA ・講和後、占領軍から進駐軍と名が変わり、裁判をうけることができることになったのは、表向きのこと。 ・進駐軍関係の事件はできるだけ示談にせよ、と通知されている。	「裏切られた女」 「続・みんなが見ている前で」

作品番号	掲載年月 タイトル	背景	暴力の実態	占領軍/在日外国人	描かれた日本人	用語	その他	単行本掲載
11	11月号 昭和三十年 渡辺朝子	・朝鮮戦争が終わり、戦争手当をあてにできなくなった兵士と生活が苦しく、お金をせびる。 ・経営していた米軍専用のバーの廃業。	・兵士との日常生活における差別発言、肉体的暴行。		・売春業者と地主 ・家族五人で農業して細々と生活する一家 ・仲間の「パンパン」は自衛隊のいる基地に引越す	・立川で「オンリー」	・オネスト・ジョン ・砂川町の基地闘争	「オールGI・さよならニッポン」 「続・みんなが見ている前で」
12	12月号 昭和二十一年 田部花子	・戦争で唯一の家族である兄を亡くし、置屋の母方の実家に世話になるが、祖母も亡くなり、借金取りに追われる。 ・将校用の娼婦の宿舎へ連れて行かれる。	・敗戦後、将校用「慰安所」から追い出され、倉敷に移る。		・軍と結託していた花柳界のボス ・警察 ・朝鮮人 ・台湾人	「慰安婦」(元芸者、売春婦、看護婦、タイピスト) 「一夜妻」	花子18歳	「裏切られた女達」 「裏切られた女達」
13	1956年 第二部 1月号 昭和廿一年 女の兵隊 青木光子	・敗戦直前に徴集され、敗戦後「慰安所」へ送られる。		・面倒を見ている「パンパン」に病気をうつされ激怒し、暴行を加える。	・隣組町による「女子軍」の新設 ・「慰安所」の監視の男 ・脱走した女性を打ち殺す武装ガード	「女子軍」 「米軍慰安所」	・光子18歳 ・内務省からの通達 「諸君は女子特攻隊として直ちに指定の場所におもむき、たえがたきをたえて、全日本婦人のたてとなるべし」 ・六か月後、GHQが占領都市の慰安所を閉鎖	「女の兵隊」 「続・みんなが見ている前で」 「女の兵隊」 「裏切られた女達」
14	2月号 昭和二十二年 保護された女 吉本信子	・敗戦後、京都の叔父のところで世話になるが、占領軍兵士に乱暴され、家出するも行くあてもなく知り合いの従妹の家にいく。 ・従妹が「パンパン」だったため、生活資金に困り仲間に入ってしまう。	・病院に連れて行った巡査による嫌がらせ。 ・従妹と「アメリカ」の取り合い。 ・MPによるキャッチ ・実家の母親や復員した兄までも妹が「パンパン」になっていると後ろ指をさされる。			平安病院での四度 にわたる検査	「スベシヤルメイド」	「保護された女」 「裏切られた女達」

作品番号	掲載年月 タイトル	背景	暴力の実態	占領軍／在日外国人	描かれた日本人	用語	その他	単行本掲載
15	4月号 昭和二十三年 オンリー 松山ふみ子	・復員した男と結婚し、蕎麦屋を始めるが、夫にだまされ占領軍に暴力を振るわれる。 ・実家に戻るが、家族・隣近所の目に堪えられなくなり、料理屋の女中奉公にでる	待ち伏せされた黒人兵に暴力を振るわれる。 ・大金を手にした妻を訪ねる元夫。	・自動車会社の極東支配人。	「パンパン」と浮気する夫	「日本妻」		「オンリー」「裏切られた女達」
16	5月号 昭和二十四年 虚栄と慾と死 佐田美保	・資産家の家で苦勞知らずに育ったが、占領軍兵士による性暴力被害をうけ、恥ずかしさの為記憶喪失のふりをする。	・世話をしてくれた男性からの性暴力。	・GHQの高級将校とその夫人。	・被害にあった女性の面倒を見る男		美保 18 歳	「虚栄と慾と死」「裏切られた女達」
17	6月号 昭和二十五年 酔どれと姉妹 大森絹子	・妻をGIに輪姦され、自殺し、子供も臓り殺された医者が絶望し、放浪の旅にでる。	三人のGIによる医者の妻への性暴力。 ・子供を臓り出す。		・医者	「ハウス」 「パンパン」	・戦争中から軍御用の「ピー屋」 ・戦争中、日本兵が中国で暴虐のやりごとくした話を聞く	「酔どれと姉妹」「裏切られた女達」
18	7月号 昭和廿六年 姉妹の目は青いか	・岩国での「オンリー」の生活から青森の新設された「パンパンハウス」に移り商売する。	占領軍兵士による「オンリー」をめぐる日本の青年への暴力、発砲。		・「パンパンたち」を移動させる与太者 ・貸間業を営む農民 ・それに反対する息子	「オンリー」	基地化が進む地方都市	「姉妹の目は青いか」「裏切られた女達」
19	8月号 昭和二十七年 めくくらと姉妹 千田澄子	・父親に占領軍幹部の屋敷のメイドとして売られるが、役目が終わると、部下の兵士に弄ばれ捨てられる。	・雇い主からの性暴力 温泉宿に宿泊していた男性客らによる暴行。	・占領軍幹部	・盲目の按摩 ・戦中軍属として大金を稼いだ父親	「ハウスメイト」		
20	9月号 昭和二十八年 自らに光ある人 畑中ゆき	・両親に先立たれ、兄妹の面倒を見るために宿の女中奉公にでるが、女将に騙され兵士の相手をする。	・雑貨店の息子から弄ばれる。 ・宿に女性を買いに来た兵士に弄ばれる。	・日本語が巧みに使える兵士。 ・輸入品チェーンストアの店主。	・雑貨店の息子 ・宿屋の女将	「女奴隷」	女性募集の広告を出した女将が警官に逮捕される	
21	10月号 昭和二十九年 ゆきずりの人 山本伸子	・「パンパン」として食べていけないが、線路に飛び込み自殺をするところを助けられる。			・学生 ・町工場の労働者	・MSA ・「高級パンパン」	・レッド・パーズ ・朝鮮ブーム	

作品 番号	掲載年月 タイトル	背景	暴力の実態	占領軍／在日外国人	描かれた日本人	用語	その他	単行本掲載
22	11月号 昭和三十年 ネオ・コールガ ー 三笠てる子	・結婚後、引っ越し先の隣室が 私娼窟で、そこにやって来た GI 二人に夫のいる前で性暴力を振 るわれる。 ・婦人同盟に参加し、団体の警 察への働きかけにより犯人が特 定される。	・GI による性暴力。	・運輸手に案内され私娼窟 に連れ込まれる GI。	・事件の噂を広めた隣に住 む主婦 ・女学生 ・基地に勤めるタイピスト ・警察	・「私娼窟」 ・ネオ・コールガ ー	・婦人民主同盟	
23	12月号 昭和三十一年 暗い過去 月田せつ子	・基地周辺に住んでいた影響で、 小学生のころから洋娼の客引き の手伝いをするようになるが、大 人になると自分も洋娼になって稼 ぎ出す。 ・親に仕事があれば、ケンカして家 出、数年間の洋娼生活後引退、 屋台をひいて自活する。	・GI による日本人の子供への乱暴。 ・夫による妻への DV。	・GI	・洋娼のボス ・駐留軍の労務者 ・ハモニカ長屋の主人	・「パンパン」 ・洋娼	集団リンチ	

- 1 マイク・モラスキー「第四章戦後日本の表象としての売春」『占領の記憶／記憶の占領』（鈴木直子訳、青土社、2006年）204頁。
- 2 「パンパン」とは、敗戦直後街頭に出没した売春婦の総称。はじめはGI（米兵）を相手にした女だけをそう呼んだが、GHQが性病予防のためGIに売春街立ち入り禁止（オフ・リミッツ）したところから、日本人相手のものも含まれるようになる。その他に「闇の女」「洋娼」「街娼」「夜の女」と呼び名は複数存在する。語源に関しては未詳であるが、①兵士が夜、花街の表戸をたたいた音からか、②仏印に上陸した時食料不足から若い女達が日本兵にパンパンと手をさしのべたところからか〔話の大事典＝日置昌一〕という説。また③娘を招き寄せるために手をたたいた音からか〔話の大事典＝日置昌一・外来語辞典＝楳垣実〕、④インドネシア語で女の意のプロムパンの訛りかという〔広辞苑＝新村出〕説などがある。
- 3 四稿となる研究は、奥田明子「GHQの性政策－性病管理か禁欲政策か」、早川紀代「占領軍兵士の慰安と買売春制の再編」、平井和子「RAAと「赤線」―熱海における展開」、出岡学「狩り込みと性病院―戦後神奈川の性病院」である。
- 4 三稿の研究として、荒井英子「キリスト教界の「パンパン」言説とマグダラの MARIA」、牧 律「山室民子にみる自律意識と純潔教育」、加納美紀代「「混血児」問題と単一民族神話の生成」である。
- 5 平井和子『日本占領とジェンダー 米軍・買売春と日本女性たち』（有志舎、2014年8月）
- 6 藤原審爾『藤原審爾作品集1～7』（森脇文庫、1957～58年）なお本研究の「裏切られた女達」は改題され作品集第四巻『みんなが見ている前で・みんなが知っている』（1958年）に所収されている。解説は河盛好蔵。
- 7 『小説公園』は、1950年3月～1958年4月に六興出版社から発売された中間雑誌である。創刊号の「編集後記」に「誰でもが愉しめる立派な小説にうち、気品があって新鮮で美しさに溢れた雑誌」を創りたいと述べる。編集名義人の吉川晋は吉川英治の末弟で、同僚幹部の石井英之介とともに文藝春秋社員だったため、『オール讀物』に近い編集となる。
- 8 藤原審爾「裏切られた女達」「目次」『小説公園』（六興社、1955年1月）
- 9 「裏切られた女達」の単行本は現在確認できるものでも四種類ある。それは①『みんなが見ている前で』（正編）（鱒書房、1955年、8、10月出版）②『みんなが見ている前で』（続編）（鱒書房、1955年11月）③『裏切られた女達』（大日本雄弁会講談社、1956年11月）④『藤原審爾その華麗なる世界 内幕小説みんなが見ている前で』（双葉社、1978年3月）である。
- 10 藤原審爾「裏切られた女達 昭和二十年 入江松子」『小説公園』（六興社、1955年1月号）22～32頁。
- 11 アメリカ兵の俗称。兵士は、衣服その他すべてのものが政府の支給品（government issue）であることからGIと呼ばれた（『戦後史大事典』：福島鏗朗）359頁。
- 12 作品では東京都大田区大森にある「慰安所」と書かれているが、敗戦直後日本政府の通達により占領軍兵士のために造られたRAAの一つと思われる。
- 13 前掲、「裏切られた女達」『小説公園』（六興社、1955年2月）49頁。
- 14 前掲、「あとがき」『みんなが見ている前で』（鱒書房、1955年8月）215頁。
- 15 RAAは、当時の内務省と警視庁が都内のおもな赤線業者やカフェ業者などを集め、占領軍への慰安対策をすすめて発足した。この組織はダンス・ホールやレストランなどのほか、大森海岸の料亭小町園をセックス用に指定、いわば日本女性の「性の防波堤」とした。（『戦後史大事典』：長谷川卓也 18頁。）
- 16 GI相手の売春婦のうち、特定の占領軍兵士とつきあう女性をさす言葉。不特定と付き合う売春婦の場合ではバタフライと呼ばれていた。
- 17 216～219頁。
- 18 74～79頁。
- 19 MSAはMutual Security Act（相互安全保障）の略称。相互防衛援助協定、農産物購入協定、経済的措置協定、投資保証協定の四協定からなる。アメリカ側からみれば、この協定は五一年の相互安全

保障に示される総合的なアメリカ援助政策のうち、軍事援助計画の一環に日本を組み込もうとするものであった（『戦後史大事典』：樋渡由美）68頁。

【参考文献】

- 大口勇次郎・成田龍一・服藤早苗編『ジェンダー史—新体系日本史9』（山川出版，2014年）
川元祥一『開港慰安婦と被差別部落—戦後RAA慰安婦への軌跡』（三一書房，1997年）
ガヤトリ・スピヴァク『サバルタンは語ることができるのか』（上村忠雄訳，みすず書房，1998年）
古久保さくら「書評 『日本占領とジェンダー—米軍・買春と日本女性たち』 『第25号女性史学』（女性史学総合研究会・女性史学編集委員会編，2015年年報，108～113頁）
小松伸六「戦後作家論 藤原審爾素論」『近代文学』（近代文学館，1951年8月号，50～52頁）
小山清「藤原審爾さんのこと」『新潮』（新潮社，1956年7月，35～37頁）
白川充『昭和平成ニッポン性風俗史』（展望社，2007年）
茶園敏美『パンパンとは誰なのか—キャッチという占領期の性暴力とGIの親密性』（インパクト出版会，2014年）
平井和子『日本占領とジェンダー—米軍・売買春と日本女性たち』（有志舎，2014年）
藤目ゆき「第九章 市民的女性運動と娼妓運動」『性の歴史学』（不二出版，1998年，315～342頁）
藤原審爾『みんなが見ている前で—占領下日本女性受難の記録—』（鱒書房，1955年8月）
前掲『続みんなが見ている前で—占領下日本女性受難の記録—』（鱒書房，1955年11月）
前掲「貞操と人権」『婦人公論』（中央公論社，1956年5月号）
前掲『裏切られた女達』（大日本雄弁会講談社，1956年）
前掲「日本の女には人権はない」『知性』（河出書房，1956年5月号74～79頁）
前掲「作家としての我が変貌」『新潮』（新潮社，1957年7月号，92～95頁）
前掲『藤原審爾作品集1～3』（森脇文庫，1957年）
前掲『藤原審爾 その華麗な世界 内幕小説 みんなが見ている前で』（双葉社，1958年）
前掲『藤原審爾作品集4～7』（森脇文庫，1958年）
マイク・モラスキー『占領の記憶／記憶の占領』（鈴木直子訳，青土社，2006年）